

P2-33 細胞診検査において核内細胞質封入体が Lobular endocervical glandular hyperplasia に高率に認められる

山梨大

端 晶彦, 奈良政敏, 大森真紀子, 平田修司, 星 和彦

【目的】子宮頸部胃型形質発現病変として悪性腺腫, 分葉状頸管腺過形成 (Lobular endocervical glandular hyperplasia, LEGH) などが注目されている。LEGH に粘液性腺癌が合併する例が報告されているが, LEGH が前癌病変の性格を持つかは結論がでない。臨床で取り扱う胃型形質発現病変としては LEGH が多いと考えられ, LEGH 症例の管理は重要である。LEGH における術前細胞診所見の特徴を検討した。【方法】当院及び関連病院で経験した症例を用いた。LEGH 症例 23 例, LEGH から発生したと推定される腺癌を合併した 5 症例, 悪性腺腫 4 例, 対象として通常の内頸部型粘液性腺癌 10 例の術前細胞診所見を検討した。【成績】LEGH 症例 (23 例) は, 細胞異型はほとんど認めず, 細胞集塊は平面的配列を示し, 黄色調粘液を有する細胞集塊が高頻度に出現していた (20/23, 87%)。明らかな核内細胞質封入体 (INCI) の出現を 17 例 (17/23, 74%) に認めた。LEGH に腺癌を合併した 5 例は前述の LEGH 特有の細胞 (黄色調粘液 5/5, 100%, INCI 5/5, 100%) に混じって腺癌を推定できる異型細胞が全例に認められた。腺癌を推定できる細胞には INCI は認めなかった。悪性腺腫では細胞集塊に立体感があり, 核の重積性, 核小体の大型化が見られ, 黄色調からオレンジ調の色調を呈する豊富な粘液を持つ細胞集団を認めた。INCI は確認できなかった。通常の内頸部型粘液性腺癌では, 腺癌と診断できる細胞集塊が認められたが, INCI は確認できなかった。【結論】INCI は LEGH にのみ高頻度に出現していた。INCI は LEGH に特徴的な所見である可能性がある。LEGH に腺癌を合併する症例では LEGH 特有の細胞に混じって腺癌が示唆される細胞の出現に注意が必要である。

P2-34 5年以上経過観察をおこなった CIN 症例の検討

産業医大

卜部理恵, 松浦祐介, 北島光泰, 川越俊典, 土岐尚之, 蜂須賀徹, 柏村正道

【目的】CIN 症例の取り扱い施設によって方針が異なり, 特に CIN1/2 の症例の経過観察の間隔, 治療を行うか否か, また治療時期についてのコンセンサスは得られていない。5年以上長期経過観察を行った CIN 症例における転帰および, その因子についてコルポスコピー所見を中心に検討した。【方法】1984 年以降, CIN と診断され, 5年以上経過観察できた 161 症例についてその転帰を消失・存続・進行に分け検討した。6ヶ月ごとにコルポスコピー, 細胞診を行い増悪が疑われた場合に組織診を施行した。2年間以上コルポスコピー, 細胞診ともに陰性の場合を消失と定義した。CIN1 では 2 段階以上, CIN2, 3 では浸潤癌となった場合を進行と定義した。初診時のコルポスコピー所見は診療録を参照し異常所見の広がりや種類について検討した。【成績】消失は CIN1 で 47/81 (58%), CIN2 で 17/52 (32%), CIN3 で 14/28 (50%) に認められた。進行は CIN1 で 6%, CIN2 で 10%, CIN3 で 0% であった。初診時に CIN2 と診断しその後, 浸潤癌へ進行した症例が 5 例みられた。初診時 35 歳未満の若年例の CIN1 では消失が多い傾向が認められた。コルポスコピー所見は, 病変が 1/2 周末満であった症例の割合が CIN1:65%, CIN2:36%, CIN3:35%, 全周性病変は CIN1:5%, CIN2:8%, CIN3:29% に認められた。異常所見が 2 種類以上みられた割合は CIN1:26%, CIN2:40%, CIN3:61% であった。CIN2 症例中, 病変が 1/2 周末満で存続・進行した例は 14/35 (40%) であり, 2 種類以上の異常所見がみられた症例で存続・進行は 15/35 (43%) であった。【結論】初診時のコルポスコピー所見と転帰との関連は見いだせず, CIN2 の症例であっても浸潤癌へ進行する例もあるため慎重な対応が求められる。

13 一般演題
(日)**P2-35 子宮頸癌検診における年次別細胞診陽性率および採取器具の違いによる検討**

豊見城中央病院

首里英治, 茂木絵美, 安座間誠, 上地秀昭, 前濱俊之

【目的】子宮頸癌検診の細胞診陽性率を年次別・年代別に比較・検討した。また採取器具の違いによる結果も併せて解析した。【方法】平成 13 年 4 月～平成 19 年 3 月まで当院健康管理センターを受診した人の細胞診陽性率, 転帰について検討した。採取器具は, 平成 13 年 4 月～平成 18 年 3 月は綿棒を使用し, 平成 18 年 4 月～平成 19 年 3 月はサイトブラシを導入しており, 両期間において比較・検討した。【成績】平成 13 年 4 月～平成 19 年 3 月より当院健康管理センターを受診した患者総数は 18,254 人であり, その中で細胞診陽性者は 169 人 (0.9%) であった。平成 13～17 年度までの平均受診者は 2,982 人, 平均細胞診陽性率は 19 人 (0.6%) であったが, 平成 18 年度は受診者 3,345 人, 細胞診陽性者 75 人 (2.2%) と細胞診陽性者数は有意に上昇した ($p<0.01$)。年代別では, 30 代, 40 代で有意に上昇していた ($p<0.05$)。平成 18 年度の細胞診陽性者 75 人の転帰は以下の通りであった。組織診で異常なし 34 人, 軽度異形成 16 人, 中等度異形成 6 人, 高度異形成 11 人, 上皮内癌 4 人, 詳細不明 4 人であった。【結論】サイトブラシを導入した平成 18 年度は, 細胞診陽性率が有意に高い結果となった。サイトブラシによる組織の採取では, 細胞を多量に採取でき, 頸管内の評価に有用と思われた。また若年者に細胞診陽性率が増加しており, その転帰では軽度異形成や高度異形成が著明に増加していた。